



興臨院 方丈前庭 資料を基に1978(昭和53)年に復元された 2022.10.22 筆者撮影

3日間の休日を京都で家内と遊ぶ

かねつな しげはる
金網 重治



1947年生まれ。千葉県君津市出身。1970年京都、中根庭園研究所入所。1977年京都にて金網造園事務所開設。1979年千葉県習志野市に移転。1983年東京都日の出町に移転。私の今までの人生の中で大きな影響を与えていただいた3人の師との邂逅・庭・中根金作先生。茶の湯・光悦寺山下惠光宗匠。風流する心・林屋晴三先生。座右の書:「図説日本大歳時記」全五巻。山、写真、茶の湯を楽しみながら、日本人の原風景を追い求めて行きたいと思っています。

1日目、京都国立博物館の特別展『京に生きる文化 茶の湯』を観る。何回見ても国宝の志野茶碗『卯花塙』と井戸茶碗『喜左衛門』には感動した。この日の夕食は隠れ家的な割烹料理店「うたかた」にて、光悦寺と一緒に稽古をしていた茶の湯の仲間達5人で一杯。

2日目、京都在住で私の弟子であり友人の矢野眞一君に車を出してもらい、鴨長明が『方丈記』を書いた庵跡の方丈石を訪ねた。この場所は意外に知らない人が多いと思います。昼は植治作の庭がある「高台寺十牛庵」で少しリッチに京料理。その後に特別公開の大徳寺聚光院を拝観。その時、興臨院も特別公開中と知り、それではと久し振りに中根金作先生の復元・改修した方丈庭園を見学。この庭は、私が中根事務所を出た次の年に完成したもので、天空に架かる石橋が特徴的です。夕食は三条高瀬川の京ばんざい「めなみ」。庭の仲間を加え4人(主に3人で)一杯、二杯、三杯。

3日目は朝5時から開店している「早起亭」でうどん。そば党の私ですが、京都ではやはりうどん、「おうどん」ですね。早朝の法然院、下鴨神社を散策して長明の方丈庵の復元建築を観る。私と矢野君は金閣寺、家内は錦市場へ。金閣寺の鏡湖池は私が京都の庭で一番好きところです。近くに住んでいたもので、雨で休みの時などは時々スケッチブックを持って出掛けていました。ついにて童安寺の庭も観て、お昼はまたうどん。南禅寺の「大力邸」は、ここも植治作庭の庭を眺めながらの食事(次はうどん以外を食べたい)。最後にリニョールした京都市京セラ美術館で日本山岳写真協会関西支部展『山との対話』を観る(私の写真も出ているので)。友人たちと歓談の後、矢野君に京都駅まで送ってもらった。もつとゆつくりと、と思ったのだがやはり貧乏性ですね。(正会員)

庭園協会創立105周年を迎えて

会長 高橋 康夫
たかはし やすお



著『日本の庭こぼれ話』

1950年生まれ、東京都小金井市出身。東京都建設局で公園・庭園・植物園事業に携わる。長岡安平翁、井下清先生は大先輩。好きな本・龍居竹之介

会員の皆様におかれましてはつづがなく新しい年をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。

昨年もコロナウイルスの感染拡大は収束に至りませんでした。緊急事態宣言が発令されることなく、ワクチン接種も拡大するなど、「気をつけながら以前の日常に近い生活」が戻っているように思えます。一時、人出が少なくなり、浅草寺の雷門から本堂が見えたのですが、現在は雷門から本堂が見えなくなるほど仲見世の人出が戻りつつあります。また、先日のFIFAワールドカップカタール2022においても満員の観客、そして声を出しての応援などコロナ禍前と同様の開催風景でした。

さて、昨年の協会事業を振り返ると、コロナの影響で対面による総会を中止、伝統庭園技藝を中止としま

したが、庭園技術連続基礎講座のオンライン化、龍居竹之介名誉会長のロングラン講演会を対面で開催、鑑賞研究委員会による清澄庭園鑑賞会を実施しました。幸いにもコロナウイルスの感染につながるような事態にはなっていません。

今年度につきましては、コロナウイルスの感染拡大の動きに十分気をつけながら、できるだけ従前のような事業展開を図る予定です。

また、今年は日本庭園協会創立105周年の記念の年です。皆様と一体となって記念事業を実施していきたいと考えています。

まず、今年度は2年間出来なかった対面による総会を実施できればと考えています。

また、105周年記念事業として2018（平成30年）に実施した都指定名勝清澄庭園再評価プロジェクト連続講演会の講演記録を一冊にまとめ、国指定名勝へのきっかけづくりとします。さらに公開シンポジウムの開催、講演会、ゆかりのある庭園鑑賞会の実施などを予定しています。

ところで、会員の皆様は日比谷公園が大改造されることをご存じでしょうか。日比谷公園は当協会の初代会長である本多静六博士が設計した日本最初の近代洋風公園です。

この日比谷公園から日本の近代公園の歴史がスタートしたと言っても過言ではありません。その後、多くの公園が日比谷公園をモデルに造られ、本多博士は「日本の公園の父」と呼ばれています。日比谷公園は、公園史の歴史的遺産であり、国指定の文化財として史跡・名勝に十分値するものと考えています。



日比谷公園 樹木があるからこそ癒しの空間になる2022.11.4 筆者撮影

しかしながら、この由緒ある公園を「都立日比谷公園再生整備計画」令和3年7月 東京都建設局公園緑地部」によって大改造します。大きな改造は①隣接する高層ビルから幅員20メートルの巨大な連絡橋を2か所設置②濃い緑の空間を創出した緑化道路及び公園周辺の太木となって癒し空間を創出している樹木の伐採（1000本ほど）③にれのき広場、第2花壇、大噴水、小音楽堂、第一花壇をすべて取り壊しイベント広場にする④三笠山を崩して平坦な空間とする、など本多博士の設計した公園に見る影もないような大改造を行うのです。これでは本多博士が設計し、多くの方が体験した日比谷公園ではなくなくなってしまいます。どこにもあるような個性も何もない公園になってしまうのです。歴史的価値あるものを破壊すると二度とともには戻りません。しかもこの計画は一般の利用者に分らないように進められ決定されています。

私は大改造計画で現在の日比谷公園が壊されることが無いように、現在の日比谷公園の歴史的意義及びその価値・魅力を多くの方に理解していただくよう活動を広げたいと思っています。会員の皆様のご理解とご協力を切に願うものであります。

新年の挨拶 19支部より

北海道南支部・支部長 桃井 雅彦



1961年8月生まれ。函館市出身。高校卒業後家業を継ぎ1986年より代表となり現在に至る。2018年より北海道南支部支部長に就任。

会員皆様におかれましてはご健勝のこととお喜び申し上げます。昨年はコロナが収まりかけたためか、講習会などが目白押しでいろいろな地域に伺うことができました。伺った先々では地元の日本庭園協会の方々にお世話になり、ありがたいことです。様々な庭や景勝地などを見学することができました。その時に思い出されたのが、龍居竹之介名誉会長の「庭はね、1年365日24時間、常に違った表情を見せるんだよ。一度見たから良いわけではないのだよ」とおっしゃっていたことです。私などは見ているようで記憶に留めてないことが多々あります。そのためか、見るたびに新たな発見や景色の印象の違いなどを思うところがあり、これから機会があればいろいろな所に伺って見聞を広げて行きたいと思っています。

宮城県支部・正会員 竹田 利光



1973年11月生まれ、仙台市出身。2004年独立開業。個人邸を中心に庭づくり、管理を行う。2021、2022年、宮城県支部長。

あけましておめでとうございませう。皆様より多くのご支援をいただき完成した東日本大震災復興記念庭園の今は、樹木も良好に成長して落ち着いた雰囲気になってきています。昨年は、道具小屋の整備、目隠しの柴垣の講習会を行いました。当支部の横山英悦氏を講師に、若手支部会員が集まり作製しました。資材は場内から切り出し、身近なものを庭に生かす大切さを学びました。除草管理は、春先より月一回、定例で行っています。トヨタ自動車東日本様、宮床老人会様のボランティアの協力は、庭園を維持する大きな力となっています。

隣地側からの倒木、イノシシの被害、作業道わきの土砂の流出など多くの課題がありますが、少しずつ改善していきたいと思っています。

宮城においでの際には、ぜひご来園ください。よろしく願いいたします。

初春のお慶びを申し上げます。

県庁所在地の宇都宮市は、戦災により古い庭が残っていませんが、室町將軍家発祥の地、後に織物産業で栄えた足利市には、今も素晴らしい庭園が現存しています。初代栃木県支部長の外丸実氏は、地域の人々とともに「足利庭園文化研究会」を立ち上げ、活動されています。活動の一つである非公開庭園の特別公開では、今回からお庭の御朱印「御庭守之印」の頒布をスタートしました。お庭巡りの楽しみとして「庭園御朱印が全国に広まって欲しい」と外丸氏。地元の学生がデザインした御朱印には頒布先の四つの庭園（厳華園、新藤氏庭園、物外軒、樺崎寺跡）があしらわれています。露頭岩盤や台地の縁といった地形を上手に利用し、建物とのバランスも素晴らしく、しかもそれぞれに個性的で江戸末から明治につくられた三庭園に対し、樺崎寺跡は中世の浄土庭園。室町期の姿に復元された同庭園は足利氏の廟所でもあり、今も静かな田畑を前

栃木県支部・支部長 清水 一樹



1989年生まれ、栃木県出身。植彌加藤造園株式会社（京都市）にて修業後、株式会社清水造園（宇都宮市）入社。現在に至る。

に、山裾に洲浜のつづく園池が広がっています。

本年も会員皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

茨城県支部・支部長 飛田 幸男



1947年9月生まれ、水戸市出身。高校まで水戸、東京で学生生活。23歳になつて造園を志し京都へ7年間修行。水戸へ戻り、32歳で独立し、現在は(株)植幸会長。2020年度「現代の名工」になる。時々思い出す庭…大徳寺高桐院の東南(モミジ)の庭。興味がある作庭家…夢窓疎石。

あけましておめでとうございませう。景気低迷や核家族そして老後の不安、そこにコロナ感染症の猛威が拍車をかけ、庭づくりは後回しの状態が今年も続きそうです。

例年秋に茨城県造園技能士会と協賛して技能講習会を開催していましたが、昨年11月3日(木)には、支部主催で常陸大宮市に位置する岡山家住宅の庭園見学会を行いました。常陸大宮市長鈴木定幸氏にも参加いただきました。

岡山家住宅庭園(養浩園)では、2019(令和元)年6月、文化財庭園保存技術者協議会の技能研修会が行われ、地元茨城県の庭園ということで私も参加協力しました。

岡山家には偕楽園好文亭を模した

三階楼があります。また庭の池では近所の子供たちが冬はスケートを楽しみ、春には花見を催し、徳川斉昭公が「人は民と偕に楽しむ」思想を実践していました。その心が伝わったのか、文化庁は2022(令和4)年夏、喜雨亭を国登録有形文化財に、養浩園を国登録記念物に登録しました。

コロナ禍でもあり、今年度事業は県内の庭園を中心に見学会を企画する予定です。

埼玉県支部・支部長 山田 祐司



新潟県出身。2003年みづばち造園設立。

あけましておめでとうございませう。本年もどうぞよろしくお願い致します。

私自身、埼玉県支部の活動に参加し始めて、早いもので15年が経ちました。参加当初、研修会についていくだけでも大変でしたが、一つ一つの経験をとても新鮮に感じていました。そして、支部活動を通じて諸先輩方の庭を実際に目にする事ができ、自分もこんな庭をつくってみたい、つくれるようになりたいとあこがれを持つようになりました。私な

りに試行錯誤を繰り返しながら庭をつくっている現状ですが、今でもその思いは変わらず心に持ち続けています。良質な庭を一つでも多くつくっていくこと、簡単なことではありませんが、チャレンジし続けなければならぬことと思っています。埼玉県支部がより良い庭を一つでも多くつくっていくような新たな庭づくりにつながる支部活動に行きたいと考えております。

東京都支部・支部長 鈴木 康幸



1967年7月生まれ。東京都国立市出身。1989年、造園業に従事。2000年(株)植繁代表取締役就任、現在に至る。好きな庭…旧福武書店迎賓館庭園。好きな有名人…タモリ。尊敬する人…小杉研三

新年あけましておめでとうございませう。

昨年6月の東京都支部総会にて正式に支部長に任命されました。新しい体制は、支部長の下、副支部長2名、そして5つの委員会を設け、それぞれに委員長を付けました。総務委員会、技術指導委員会、広報委員会、伝統文化委員会、自然環境委員会です。

10月には広報委員会が中心で東京

都支部有志により日比谷公園ガーデンニングショーに出展し、11月には伝統文化委員会が中心となり埼玉県支部のみなさんと埼玉県方面の見学会を実施しました。その中で、遠山記念館の庭園設計を龍居庭園研究所が行っていたことが分かり、図面も発見され、実物も拝見できたことが印象的でした。同じく11月に自然環境委員会主催で奥多摩方面への山登りを行いました。令和5年度の活動は未定ですが、会員のみなさんに喜んでもらえる事業を企画いたします。参加のほど、よろしく願います。

神奈川県支部・支部長 米山 拓未



1972年12月生まれ。神奈川県出身。鎌倉松原庵庭園を手がけてfontzグループ東日本の星野リゾートを含む全店舗の正月飾りを担当。横浜長生寺、東京感通寺庭園を作庭。建築士の家から店舗の庭まで幅広く作庭を展開している。2017年からフランスにて日本庭園セミナー講師を務め、現在フランス日本庭園協会の名譽顧問。好きな庭…沖繩グスク群。好きな有名人…ブライタン国王。尊敬する人…町場の腕のいい職人。

神奈川県支部としては、瓦土塀の完成お披露目会を関係者を招いて開催して一区切りとし、その後、コロナの第8波に入り、会員の安全を第一に考え当初予定していた活動を全て中止にしました。現在も感染者が増え、第9

波に入った状況を踏まえ、来年度の活動は、今後の感染状況により判断します。安心して会員達が集まれる平穏な日々が来ることを願っています。

現在、最も勢いがあり熱のある本支部は、若い会員も多くいます。全国から多くの参加者が集うような活動を再開する予定です。楽しみにしててください。

新潟県支部・支部長 小林 紀昭
こばやし のりあき



1958年12月生まれ。新潟県出身。大学卒業後、地方公務員になったが、14年間で退職。妻の実家の造園業にはいる。7年後、現在の（有）創風苑を立ち上げる。好きな庭…桂離宮、田中泰阿弥作庭の庭。好きな有名人…タモリさん。尊敬する人…尊敬する人ばかりで困っています。

新年あけましておめでとうござい
ます。

昨年は、新潟での庭園視察研修を開催し、多くの人に参加いただき本当に有難うございました。何分至らない点が多々ありましたことを先ず
もってお詫び申し上げます。

さて、コロナ感染はまだ心配ですが、今年は色々な活動が各所で行わるのではないかと期待しています。昨年の支部長連絡協議会で報告された活発に活動されている支部を参考にし、若い人たちの意見を取り入れ

ながら今後の活動を展開したいと思
っております。また皆様から面白そ
うな情報があれば教えていただき、
研修会の参考にさせていただきたい
と思いますので、ご連絡等よろしく
お願いします。

最後に、今年も皆様にとってより
良い年になりますよう心よりお祈り
申し上げます。

石川県支部・支部長 宮本 広之
みやもと ひろゆき



1958年生まれ、石川県津幡町出身。
謹んで新年の祝
詞を申し上げます。

早いもので、支部長就任の二年間
が過ぎてしまいました。主だった行
事が何もできずにいた一昨年。何と
かコロナ禍を掻い潜り、講習会を二
度行うことができた昨年。難しい昨
今を考え、本年は役員一同で、知恵
を絞っていききたいと思っています。

最近、私の周辺や移動の途中で、
やたら新築住宅が目が向くようにな
りました。今風の建物です。ここで
自分なら、どういうことをするかな
と妄想し始めました。今まで目にし
ていても考えなかった他愛もない物
もこんな風に使えるなどと…。作庭
欠乏症初期症状なのかも（笑）。昨

今、新築やりノバージョンでの若手
関係者の仕事ぶりは、私の目から見
ても興味深いです。若手庭師の方々、
チャンス到来ですよ。是非この機会
に納得いく作品を手掛けていって
ください。

本年も皆様のご健勝でご多幸であ
りますようお祈り申し上げます。

愛知県支部・正会員 鈴木 富幸
すずき とみゆき



新年明けまして
おめでとうございま
す。皆様におかれ

ましてはつつがなく新しい年をお迎
えのこととお慶び申し上げます。

愛知県支部では、この3年間コロ
ナの影響で支部活動が、残念ながら
全く出来ませんでした。今年は、支
部長と連携し若手支部会員の要望を
取り入れながら、愛知県支部らしい
活動（講習会、見学会、ガーデンシ
ョウ出展等々）を開催していきたく
と思います。

さて、私事ですが昨年は霊園の工
事に携わりました。その作庭に当た
り霊園としてのコンセプトを検討す
る際に、死について考える機縁とな
りました。その頃は、コロナ禍やウ
クライナ戦争で多くの方が亡くなる

という悲しい出来事が日々報道され
る度に、死とは何かを自問自答しな
がら見ておりました。死を改めて見
つめ直すことで、生を捉え直し、年
齢を重ねてきた自分の中で、「残され
た人生をいかに生きるか」と内省し
ながら、日々仕事をしておりました。
死生観を再考し、自分はこれからも作
庭に身を投じながら、お客様に喜んで
いただけるよう、愚直に邁進してい
きたいと思っております。

新しい年がさらに良い年になるよ
う祈念いたしまして、私の新年の挨拶
とさせていただきます。

近畿支部・支部長 山田 拓広
やまだ たくひろ



1964年12月生まれ、京都府出身。近年は海外の日本庭園について状況調査及びアドバイスを行うことも多い。好きな有名人…最近エルビス・プレスリーを見直
しました。

近年は、日本庭園について北米日
本庭園協会や欧州日本庭園ネットワ
ークなど、海外でも活発な活動がな
されています。1996年のポ
ランドにおける国際日本庭園シンポ
ジウムから27年、当時から海外の日
本庭園について興味を持ち、あるい
は関わっている方は多数いらつしや
いましたが、繋がる機会がなかなか

ありませんでした。近年の動きは昨年開催された国際日本庭園シンポジウムが契機となっています。新型コロナウイルスの流行から、生活基盤を大切にしたい持続可能な社会の構築に向けたSDGsの動きも加速化しています。私たちが扱う日本庭園は自然と共生する日本の生活文化の発露だと考えます。日本国内はもとより海外に向けても私たちの知識と経験を伝え発揮することが期待されているのではないのでしょうか。

新たな年を迎え、志も新たに皆で力を合わせ活動していきましょう。

岡山県支部・支部長 三宅秀俊



1950年生まれ。岡山市出身。1968年岡山県立興陽高等学校造園科卒業後、京都市富田造園勤務。1971年に独立後、1978年（有）三樹園設立、現在に至る。

新年あけましておめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症に悩まされ、早くも4年目になりますが、皆様におかれましてはどうですか。他業界に比べれば影響が少ない業種かと思われませんが、まだ気を許せない状況です。

当支部においては、設立以来新し

い会員もあまりなく、年齢を重ね次第に逝去される会員もあります。またコロナ禍により支部としての活動が何も行われておらず、県外での研修も計画直前で中止となりました。

当協会のみならず、リモート会議が多く早く皆様に直接お会いできる時を楽しみに、今年は何とか頑張っていきたいと思っています。

一日も早いコロナ終息を願うとともに、皆様においてはしっかりと活躍をお祈り申し上げます。

広島県支部・支部長 藤原忍



笠岡市出身。

新年あけましておめでとうございます。

支部メンバーは8名です。備後地方の新型コロナウイルス感染者が毎日100名と発表されている状況ではなかなか集まる事が出来ません。もう少し落ち着いたら見学会を開催する予定です。

私事ですが、昨年は忙しくあつという間に過ぎた感じでした。応援で作業した現場のことです。他工事でこられていた某業者の方々が整地時に使用する道具である「こうがい板」を一人も使用していなかったこ

とに気づきました。私は運良く、いろいろな造園現場に行かせていただいて今があると思っています。今年の抱負として、この経験を少しでも役立てたいと思います。

鳥取県支部・正会員 田中節照



1978年生まれ、鳥取県出身。23歳でブラジルへ移住。26歳で帰国。伊吹植物園に7年間勤務。33歳で独立、雪松造園を設立。2016年、株式会社雪松に改名。好きな庭：自分がつくった庭。好きな有名人：河井寛次郎。思いがあれば技術はあとからついてくる。尊敬する人：廣池千九郎、孔子、キリスト、釈迦。

今年の第一目標は、石の彫刻を基本から学び直すこと。そのため、1月には愛知県岡崎市の彫刻家の下で1週間特訓を受けることになった。今までは我流で挑戦してきたが、やはり一度基本から学ぶ必要を感じた。

第二の目標は、クロマツの手入れを徹底してすること。拙宅のマツだけで四苦八苦していることから脱却して売物のマツをもっと手入れすること。恥ずかしい目標であるが、実現できている。

第三の目標。新人を募集して若い職人を育てること。

四国支部・支部長 米谷進吾



1960年生まれ。香川県出身。1978年から従事。好きなこと：商業施設及び古庭園の見て歩き。巨樹の見て歩き。

初春とはいえ厳しい寒さが続いております。新年あけましておめでとうございます。

今回は四国支部の紹介をします。会員数23名で、香川県11名、愛媛県9名、徳島県3名です。3県を跨ぐ活動で、広範囲ゆえ地方色の豊かな会員の構成からくる多様な工法、考え方に満ちた会員交流の支部となっています。コロナ禍において、ご多分に漏れず十分な活動ができずにいましたが、そんな中、秋の剪定シーズン直前に「マツの剪定講習会」を開催することができました。多数の支部会員が共通の他団体との共催でしたが、前支部長越智将人氏、支部会員の小林賢也氏による講義、実技講習でした。若い人は深堀りに、年配者は原点に立ち返れる濃い内容の刺激の多い講習会でした。

今後は、魅力ある活動と技術講習会を開催することを通して、会員相互の交流と技術の向上を、会員の増加の策として支部会の運営に取り組みたいと思います。

庭園の冬支度

日本各地の「庭園の冬支度」の写真を募集したところ、北海道や石川、福井、宮城、神奈川、東京から多くの情報をいただきました。

届いた写真は、防寒、防雪を目的とした「冬囲い」や「雪吊り」、「霜除け」、「敷松葉」、正月に向けた「門松」や「正月飾り」、そして「露地の冬支度」などです。地域のたよりとともに紹介します。

冬囲い

北海道、東北地方の日本海側、北陸地方のような豪雪地帯で、冬の間、樹木(主に庭木)を積雪や冷気から保護するために「わら」や「こも」を用いて囲んだり、幹や枝を支える「冬囲い」をします。

冬囲い

北山台杉の冬囲い

宮本広之氏作・2021.12.9撮影

石川県と言えば、兼六園の雪吊りが有名です。その手法は高木に施すリング吊りや幹吊りがあり、低木には三又絞り等が用いられます。

写真は北山台杉の冬囲いです。高木は、リング吊りが美しい設えとなるのですが、リング吊りの支柱を固定するには、台杉は立ち木(幹)の安定度が足りません。そこで、取り木(枝)を吊るためにはひと工夫必要となります。穂先は当地での水分の多い重い雪が乗ると、傷みは重大です。タイトに絞ることとなります。

ところで、昨年雪吊り作業中に冬支度ということで、モズのはやにえを地上1.5mの所で見かけました。本年は降雪量が多いのでしょうか！
(石川県・宮本広之)



白山平泉寺近辺の冬囲い

内田均氏・2022.10.22撮影

福井県内でも豪雪地帯の勝山市平泉寺町平泉寺地係では唐竹と荒縄(リング吊り)による雪吊りでは、崩壊するおそれがあるので丸太でウマ(骨組)を造りそれに貫板や唐竹を括り付けます。また、景観を考慮して唐竹で全体を囲うこともあります。
(福井県・土井直紀)



栃木中央公園の雪吊り(北部式)

清水一樹氏・2010.2.2撮影

栃木県内は山間以外で雪が積もることは珍しく、年に一度あるかないかの雪景色です。頭飾りにはワラボッチをのせ、割り竹の裾回しに縄を結ぶ北部式とほぼ同じ構成です。(栃木県・清水一樹)

オリジナル門松と 正月飾り

竹田利光氏作・2020.1.1撮影

スギは寿命が長く縁起の良いものです。カワイイとユーモアをテーマに創作した門松と正月飾り。これからも新しい‘かたち’を発信します。(宮城県・竹田利光)



オリジナル門松

米山拓末氏作・2022.12撮影

設置の様子と出荷風景です。鎌倉、東京、軽井沢の飲食店やお寺に設置します。(神奈川県・米山拓末)



門松

正月に年神様を迎えるための依り代という意味があり、家の門口に立てる松の飾りのこと。一年中落葉しない松、成長が早く生命力の強い竹、新春に開花し年始にふさわしい梅と3つの縁起物が用いられるのが一般的ですが、近年は斬新なデザインのオリジナル門松も見られます。



数寄屋の家の門松

廣瀬慶寛氏作・撮影

数寄屋の家(本号16頁で紹介)の門松です。青竹はそぎ切りの出飾りで対に配した伝統的な形です。

(神奈川県・廣瀬慶寛)

雪吊り

冬季、雪が付着することで、樹木の枝が折れないように縄で枝を保持する設えのこと。北陸地方(特に富山県や石川県)では、専ら雪囲い(ゆきがこい)と呼ばれ、実用的な意味合いが大きいのですが、降雪量の少ない地域の庭園では雪吊りで冬の景観を演出しています。

旧岩船氏庭園(香雪園) の雪吊り(北部式)

桃井賢二氏作・
2020.12撮影

雪が降り始めた頃の雪吊り。頭飾りにワラボッチをかぶせた北部式です。

(北海道・桃井賢二)



兼六園の雪吊り (兼六園式)

高橋康夫氏・
2019.12.13撮影

金沢兼六園の雪吊りは有名です。30cm以上の降雪がある金沢では、重く湿った雪がクロマツに積もり、その重みで枝が折れる雪害から守るために雪吊りが施されます。頭飾りは荒縄巻と飾りいぼ結び、裾回しを設けず縄を直接枝に吊り込んでいるのが兼六園式です。もともとリンゴの重さから枝を守るために縄を張った枝吊り方法を応用したもので、そのため別名「リンゴ吊り」とも呼ばれています。(東京都・高橋康夫)



小石川後楽園・ 一つ松の雪吊り (北部式)

高橋康夫氏・2020.1.3撮影

東京ではあまり雪は降りませんが、冬の景色を演出する目的も兼ねて雪吊りが行われています。

頭飾りはワラボッチ、割り竹の裾回しに縄を結ぶ北部方式です。割り竹が横から見て8の字を描くように回すのが、北部式の特徴です。

(東京都・高橋康夫)

清澄庭園の雪吊り(南部式)

酒井和佳子氏・2022.10.15撮影

清澄庭園の雪吊りは南部式です。頭飾りは吊り縄を編みこんだ「ばれん」という装飾が施され、裾はシュロ縄を回します。シュロ縄がきれいな弧を描くように吊るのが南部式の特徴です。(東京都・酒井和佳子)





清澄庭園の霜除け(巻き下し)

酒井和佳子氏・2022.12.15撮影

「巻き下し」は枝を枝折り、その上にすぐったわらを下から上へとあてがっていき、頭飾りにワラボッチをかぶせます。最後に黒シュロ縄で上から下へ巻きおろして化粧をします。根元は、「鎧」と同様に黒シュロ縄で化粧巻きをしています。

(東京都・酒井和佳子)

旧古河庭園のソテツの霜除け(鎧)

高橋康夫氏・2020.1.10撮影

この形は「鎧」です。すぐったわらを下から一段ずつ鎧状に巻き、頭飾りにワラボッチをかぶせます。足下にわらをのせて黒シュロ縄で化粧巻きをします。ここでは根周りには敷松葉が施され、冬の庭園に趣を添えています。

(東京都・高橋康夫)



霜除け

暖かいところに育つソテツは桃山時代に渡来し、庭園に導入されました。現在は、温暖化で防寒対策を施さなくても冬を越えますが、冬の庭園を演出する風物詩として霜除けが行われています。

露地(茶庭)の冬支度

敷松葉とは、地面に松葉を敷くことで、冬場にコケを霜や凍結から守るために行われます。露地においては、冬を感じさせる趣から好んで敷松葉が施されます。初釜の設えも正月を迎えるための冬支度です。

露地の敷松葉

金網重治氏作・2022.12撮影

冬の寒さや寒風から庭のコケを保護する実用性と冬景色を楽しむ美観性も兼ねています。庭の全面に敷いたり、または所々に敷いたりと流儀や個人の好みによりいろいろな敷き方があります。

(東京都・金網重治)



露地の敷松葉

廣瀬慶寛氏作・撮影

松葉が敷き詰められた庭は、温もりと神妙な雰囲気漂います。(神奈川県・廣瀬慶寛)



露地のワラボッチ

廣瀬慶寛氏作・撮影

ワラボッチは防寒の目的で施されますが、露地では冬の庭に趣を添えます。デザインを変えて楽しめます。

(神奈川県・廣瀬慶寛)



初釜の設え・青竹

金網重治氏作・2022.12撮影

茶の湯では口切の頃や正月の初釜の前に筧や竹樋、竹垣の一部分を青竹に差替えて、改まった気分を演出します。

(東京都・金網重治)





はじめに

2022（令和4）年7月22日から8月10日までの20日間にわたるアメリカ出張の成果を報告します。今回の訪米の主な目的は、①日本庭園講座「Waza to Kokoro - Hands & Heart Level-I Seminar（以下、技と心セミナー）」の客員講師、②シカゴ市の大阪ガーデンの視察、③北米日本庭園協会の地方大会への参加です。

「技と心セミナー」講師

今回、私が客員講師として派遣された「技と心セミナー」は、ポートランド日本庭園を運営母体とする教育機関「International Japanese Garden Training Center」が毎年開催する日本庭園の技と心を学ぶことに特化した短期集中講座です。当協会からは、2016（平成28）年から3年間にわたり前国際活動委員長の三橋一夫氏が講師を務めており、その間に本川勇氏、曾根将郎氏も派遣されています。このセンターは、ポートランド日本庭園のチーフ・キュレーターを務め、当協会の評議員

でもある内山貞文氏が統括しています。またポートランド日本庭園CEOのステイブ・D・ブルーム氏は、2018（平成30）年に行われた当協会100周年記念式典の折に特別名誉会員に推挙されています。今回の派遣は、このようなポートランド日本庭園と当協会とが紡いできた長年の友好関係に基づいて行われたものです。

今回のセミナーは初心者クラスに位置付けられるもので、7月25日から31日までの7日間のプログラムです。過去には中堅クラスも開催されています。受講生は11名（途中棄権1名）で、既に造園設計や施工に携わっているプロの方が中心です。このセミナーでは毎回アメリカ国内だけでなく他国からも受講生が集まりますが、今回は初めて日本からの受講生がいました。その方は日本で造園業を営む外国出身の方で、日本では日本庭園に関する総合的な講習を受けられる機会が少なく、また自習をするにも日本語以外の適当な本が無いため、今回の受講を志したとのことでした。このことから、本セミナーの国際的な意義が感じられます。



図1 設計演習の様子（ポートランド日本庭園提供）

講座内容は、複数の庭園様式が併置されているポートランド日本庭園の特質を活かした園内観察に始まり、茶道師範であるJan Waldmann氏によるお点前のデモンストレーション、庭師の道具の紹介、飛石や延段の設計演習（図1）、そして竹垣のイボ結びに始まる竹垣製作実習と蹲踞や延段を据える作庭実習、透かし剪定の実習があります。講座は全て英語で行われ、そこでは常にディスカッションが重視されます。講師の内山氏がしばしば受講生の意見や考えを引き出すような投げかけを行い、そこで生まれる議論が講座の質をさらに高めていくように感じました。



図2 作庭実習で小庭をつくる（ポートランド日本庭園提供）

日本の職人の間で続けられてきた「見て盗め」というような教授法は、このような国際的な場面では限界があります。このセミナーは、このような米国式の教授法を用いることでより多くの人々の向学心に応えられるように開発された点に特徴があり、こうして世界中からの需要を受けて常に進化を続けています。私は主に実習の講師を任されました。作庭実習は、ポートランド市郊外の「Smith Rock」という石材店の置き場を借りて、日本における造園技能検定の1級実技課題をアレンジした小庭（蹲踞、延段、飛石、竹垣）をつくる内容です（図2）。今回は1



図3 剪定を指導する筆者
(ポートランド日本庭園提供)

グループ3名で、およそ3日間かけて課題に取り組みます。この作庭実習では、受講生は基本的には個人の創作意欲を発揮する場所ではないことを心得て、図面と講師の指導の通りにつくることに取り組みます。これにより、まずは各自の経験の中に一つの基準をつくることを目指します。

また、この実習中の昼食は毎日日本食の弁当が振る舞われ、そこで食文化の解説が行われます。食文化までと思われるかもしれませんが、日本の文化を全く知らない人が日本の庭だけを学びとうとすることは、不毛であることを私たちは知っているはず。このように、このセミナーでは異文化間における効率的な学びを国際的な方法で提供するよう、常に工夫されています。

剪定実習は、ポートランド市郊外の植木生産農家「[sei Nursery]」で行われます。この実習では Aesthetic Pruners Association 認定講師の

Maryann Lewis 氏が剪定の講義を行い、私は剪定のデモンストレーションと実習指導を担いました(図3)。剪定実習に使われたのは大きなベニシダレです。これはこの地域でも一般的な庭木ですが、日本と違って無剪定のままポリウム感のある姿で庭に植えられていることが多く、こちらではそういうものとして認識されているようです。透かし剪定を施すという発想が一切ない人たちに与っては、最初はその意義がよく飲み込めずに、枝を切ることを躊躇する人もいます。そのためここでは、枝振りの美しさを見せることや、樹冠内に光を入れて次世代の枝を育てるといった、剪定を施す意義をしつかり説明する必要があります。

このセミナーのような日本のものづくりに関する国際的な教育の場面では、従来の日本の職人修行のように一方的に作業を身体に叩き込ませたり、職人技とは全てが修練された感覚によるものであるかのような伝え方をしたりすることは、日本文化の謎めいた魅力を増幅するだけで、ほぼ無意味だと感じました。まずはこちらが相手の国の風土や嗜好の理解に努め、お互いの価値観を尊重しながら、科学的な説明と対話を重視した実践を行うことが、効果的な

学びを生みます。限られた時間で行うセミナーですから、受講者各自がこれから自分自身で正しい方向に学んでいけるように、理解と価値観の基礎を築いてあげることが、今回のような講師の重要な任務だと思いました。

例年、ポートランドの夏は湿度が低く、過ごしやすいことで知られていますが、今年は連日猛暑が続き、過乾燥が逆に身体に堪える過酷な実習でした。その中で黙々と作業に取り組む受講者の皆さんの姿から、日本庭園に対する熱意や期待がとて高いことが伝わります。日本の庭師の職能が、こうして海外の多くの人たちに学ばれ、使われ、次の世代に受け継がれていくことを思うと、私たちも少なからず世界の国々が取り組む環境づくりに参加していることを認識させられます。また、受講生たちとコミュニケーションをとる中で、私たちが曖昧にしていたことや感覚だけに頼っていたことなどについて、改めて気づかされることも多くありました。こうして情熱を共有できる人たちが世界中にいる以上は、私たち日本の庭師もより一層学び、常にお互いが高め合える関係でいたいと思いました。

大阪ガーデン視察

セミナーを終えた翌日に飛行機で移動し、8月2日と3日の2日間にかけてイリノイ州シカゴ市の「大阪ガーデン(旧名称: The Garden of the Phoenix)」を訪問しました。この庭園は、2019(令和元)年に国土交通省「海外日本庭園再生プロジェクト」にて三橋国際活動委員長率いる当協会メンバーにより修復工事が行われています。場所はシカゴのダウンタウンからほど近いミシガン湖のほとりのジャクソンパーク内にあり、1893(明治26)年のシカゴ万博をきっかけに造営されたものです。当時、園内に鳳凰殿と名付けられた純日本建築のパビリオンが建てられたことが、旧名称のPhoenixの由来です。1993(平成5)年に大阪市とシカゴ市の姉妹都市締結20周年を記念して、現在の名称に改名されています。

私にとっては、2019(令和元)年の修復工事に参加して以来の訪問です。当時の私は、文化庁派遣の在外研修生としてポートランド日本庭園に勤務していたため、三橋氏に頼んでボランティア参加しました。今回の出張は、この大阪ガーデンにも以前から関わっている内山氏の力を

借りて、庭園を管轄するシカゴ公園管理局（Chicago Park District、以下C P D）に私の訪問を提案し、C P Dより出張経費のサポートを受けたことで実現することができました。当協会チームが訪れた当時から変わらず庭園管理を担当するC P D職員（Karen Szyjka氏とMichael Dimitroff氏は、私の再訪を大変喜んでくださいました（図4）。

今回の訪問の目的は、前回の工事箇所の視察と庭園管理に関するアドバイスの提供です。前回の修復のメインであった滝組上部は損壊などもなく、修繕した葦こぼし園路部分も良好に保たれています。滝の湧出口の周囲には新たにコニファーが植えられています（図5）。これは三橋氏から滝の上部は植栽で暗くするようにと指導されていたため、後に補植



図4 左から Michael Dimitroff 氏、Karen Szyjka 氏、筆者（筆者撮影）

したとのことでした。

庭園全体に対する私の所見として、主に①樹木の透かし剪定のアドバイス、②舟着き周辺の水生植物の手入れ（図6）、③鯉の流出防止ネットの修景、④飛石園路の改修、⑤景石の据え方、⑥灯籠の傾きと蹲踞の筧の高さ、⑦園内の蹲踞の復旧、以上の点について、現地で指摘および解説をしました。後日、その内容とアイデアスケッチをレポートにまとめ、C P Dに提供しています。この庭園の最大の特徴は、ミシガン湖と池の水を共有する構造と景観ですが、近年ではこの水位が定まらないために護岸の後退や沢飛びの水没、鯉の流出などが起き、これが大きな悩みの種になっているようです。

また、この庭園に関する大きな動



図5 修復工事箇所にコニファーが補植されていた（筆者撮影）

きとして、隣接する敷地に2025年にオバマ大統領記念図書館の建設が予定されていることがあります。これにより庭園がより注目され、来訪者の急増も予想されることから、現在シカゴ市とC P D、The Garden of the Phoenix Foundationらが協働して、庭園の拡張改修計画を進めています。この計画は、1997（平成9）年に内山氏が描いた庭園改修プランを元にして、三橋氏が後に敷地拡張部分を加えて新たに全体構想図として描いたマスタープランをベースに検討が進められており、現地のランドスケープ設計会社（基本設計をまとめて各ステークホルダーとの協議を続けています）。

今回のシカゴ訪問では、在シカゴ日本総領事館にもコンタクトを取



図6 舟着き周りの植栽管理や筧の高さなどについて助言をした（筆者撮影）

り、広報文化センターの柴田勉領事とお会いする機会を得ました。総領事館も庭園の拡張改修計画に協力しており、柴田領事とは2時間あまり大阪ガーデンの現況所見や計画の進捗について、またシカゴエリアの日本文化全般に関する情報交換をし、当協会としても引き続き大阪ガーデンの発展のために協力を惜しまない旨を伝えました。

この庭園には日本人庭師が常に関わる体制がないため、管理担当者のSzyjka氏が「技と心セミナー」で学び、現地造園業者を監督しています。おそらく海外の日本庭園ではこのような体制が一般的になっていくと思いますが、庭園の管理者が日本の技術者と直接関わり続けていくことは、その庭園が本当に日本の美意識に基づいているという根拠を示したり、また、適切な管理の継続によって日本庭園らしい景観を成熟させていく上でも、理想的なことだと思います。今回の訪問は、当協会と大阪ガーデンの絆を繋ぎ続けるための一歩としても、意義のあるものになりました。

北米日本庭園協会地方大会

大阪ガーデンの視察を終えた翌日、高速バスでシカゴ郊外のロック



図7 手入れが行き届いた Anderson Japanese Gardens の植栽 (筆者撮影)

フォードという街に移動し、8月4日から8日まで行われた北米日本庭園協会 (North American Japanese Garden Association. 以下、NAJGA) の地方大会に参加しました。NAJGA と日本庭園協会とは、2014 (平成26) 年に交流連携協定を結んでいます。

今回のイベントの会場になった Anderson Japanese Gardens は、元々この地の実業家の邸宅庭園として造られたものが1998 (平成10) 年に地元組織に譲渡され、公開運営されるようになった民営の日本庭園です。作庭は、小形研三氏に学び、ポートランド日本庭園のディレクターを勤めた栗栖宝一氏によるものです。この庭園は、現在はアメリカ人の常勤庭師により維持管理されていますが、植木や園路の手入れが丹念



図8 書道の体験を通して日本の心を学ぶ (筆者撮影)

に施されている印象で、大変美しい景色が保たれています (図7)。特に、滝や建築、灯籠、蹲踞などの添景物の「見え隠れ」をつくる梢の透かし剪定が的確に施されているのが分かり、彼らの意識と技術の高さに驚きました。海外の日本庭園に触れると「日本庭園とは何か」という自問が自然に生まれますが、こうして来訪者に見せたい景色や体験を捉えて、意図的に空間の構図を整え、静謐な緊張感をつくる剪定が施されているこの庭園の手入れは、たとえば植物の種類が日本とは異なっている点も、間違いなくここが日本庭園であることを感じさせます。この庭園の管理を統括するキュレーターの Tim Gruner 氏も、過去の「技と心セミナー」で三橋氏に学んだ一人です。



図9 パネルディスカッションの様子。登壇者は左から John Powell 氏、Tim Gruner 氏、筆者 (Marisa Rodriguez 氏撮影)

今回の大会は、「Kokoro」と名付けられた日本の心に関するセッションと「Erosion Control (浸食防止)」のセッションの2本立ての内容で、それぞれ数日間かけてレクチャーとワークショップが行われました。私は前半の「Kokoro」のセッションのみ参加しました。ここでは、イリノイ大学の郡司紀美子氏による書道や茶道の実践的な講座を中心に、「Tim Gruner 氏、John Powell 氏、Randy Zimmerman 氏らによるレクチャーが行われました (図8)。講師も含め30名ほどの参加者が集まり、議論と実践を通して日本文化を捉えようとする内容に、私も多くの学びを得ました。特に、John Powell 氏の講義の中で、日本庭園 (茶庭) について「Art of Hospitality」という言葉を使

って解説していた点はとても興味深く感じました。また、プログラムの中で行われたパネルディスカッションには急遽私も登壇してコメントしました (図9)。

この大会は、参加者の多くが北米の日本庭園の庭師やディレクターなどであるため、私も含め日本庭園関係者同士の情報交換や懇親の役目も担っています。Gruner 氏とは、2019 (令和元) 年に当協会チームと一緒にこの庭園を訪れて以来となり、お互いに再会を喜び合いました。こうして人間同士が日本庭園を通して関係を続け、交流を深めていける機会や組織があることは、とても素晴らしいことだと思います。

おわりに

日本庭園は、海外の庭園においてもそれぞれが情熱を持った現地の人々によって支えられていることを、忘れてはいけません。私にとっての今回の訪米の最大の成果は、その人たちと出会えたことです。これからは、日本の庭園文化や技術を世界の財産の一つとして捉えて、日本人も外国人もお互いに協力してその素晴らしさを追求し、発展させていく時代だと強く感じています。

(国際活動委員会事務局長)

庭に向かう私の姿勢

第3回 『庭 いつもあこがれます』

ひろせ よしひろ
廣瀬 慶寛

2022 (令和4) 年7月31日 (日) オンライン講座

今回、急遽講師を務めることになり、資料など十分に確認していない状態ですが、よろしくお願いいたします。

まず初めに、庭づくりをするにあたって、日頃考えていることを紹介します。

庭 いつもあこがれます

かたく つめたそうにみえる

木のはだに そつとふれてみると

あたたかくて 木のいのちが息づいていることが感じられます

【廣瀬慶寛プロフィール】



1951年7月、新潟県生まれ。飯田造園設計事務所に入社し、飯田十基氏より

雑木の庭を習う。1981年、作庭処廣瀬を立ち上げる。主な活動…住宅庭園の作庭、古庭園の修復等。元文化財庭園保存技術者協議会代表。日本庭園協会常務理事・技術委員長、現在に至る。

木が花をつける
いつも緑の葉をつけている木
葉の色が赤や黄色になり葉が落ちてしまう木

とんがっている葉 大きな葉
ぎざぎざした葉

葉が枝についているようすも
みんなちがいます

これは、つくる人それぞれによつて庭は違うということをも、木に例えて表した言葉です。

暮らしをお手伝いしています

私は庭をつくることを通して暮らしの豊かさづくりのお手伝いをしています。

プロとして質の高い技術や知識を広く普及させるために、常に講習会や勉強会などには、スタッフと共に参加し、造園について真剣に考えてきました。

目に見える素材を使って、目に見

えない安らぎのある空間をつくる造園の仕事は、深めれば深めるほど、奥の深いものです。また、伝統の技術を駆使しつつ、常に新しいいぶきを吹き込みながら創造していくこの仕事は、暮らしに心のゆとりが求められる今、大きく注目されています。

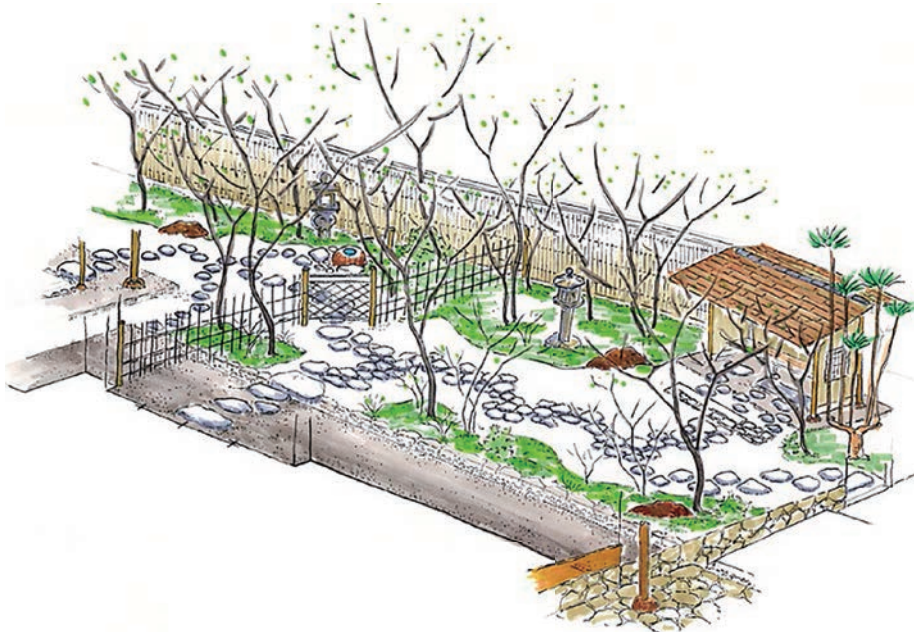
個人の庭ばかりでな

く、都市景観づくりにとつても、専門家としての知識や発展的な考え方が必要とされています。

人に心がある限り、庭がなくなることはないでしょう。心と深く関わりながら進めていく造園の仕事に図り知れないやりがいを感じています。ここには、人としての未来があるのです。

心を読んで、空間をつくる

「いったいどうやって庭をつくれればいいのだろう」と、庭づくりについて素朴な質問に出会うことがあります。



落葉樹の美しさ楽しみの庭・露地のスケッチ

私は、どのような庭をつくってほしいと望まれているのかをできる限り知ろうとします。どのような木を植えて、どのような石を入れるかという前に、どういったニュアンスの庭ができれば満足してもらえるかということを理解するのです。

さらに、庭をつくりたい人のイメージをより具体的でわかりやすくするために、プランを図面やイメージスケッチで表現します。立体の模型をつくることもあります。

その図面などに納得し、予算のチェックがすめば、いよいよ実際の庭づくりがスタートします。

そして、出来上がった庭が施主にとって納得のいくものであることはもちろんです。そして、プロとしての技量が盛り込まれ、心から満足してもらえるものでなければ本当の成功とは言えません。

また、様々な情報を施主に提供できる存在でなければならないと考えています。植物への理解は実践を通して生まれるものです。私は、植物のプロとし、そのことを肝に銘じて、愛情を持って日々、植物と接しています。

目には見えないものがある

一口に日本庭園といっても、時代と共に変わります。しかし、日本人が自然そのものの中にやすやすと言葉にすることのできない美を感じ取り、それを庭の空間を借りて表現してきたことは確かです。

自然を取り入れながら、計り知れない創意と日本人らしい美意識が盛

り込まれた庭は、日本的な文化の伝統として受け継がれてきました。

日本の庭の歴史は1200年ほど前に遡ります。狩猟から農耕へと生活の柱となるものが変わり、人々が農作業をするための多目的な広場を持つようになりました。人は、そこに木や花を植えたり、石を置いたりしたのでしよう。自分の身近に、美しいと思う自然を取り込みました。

このような素朴な庭がある一方で、奈良・平安時代、大陸伝来の仏教の影響で深く考慮する対象としての庭が出現しました。大きな寺院や貴族の庭です。

鎌倉時代、武士が台頭し、政情不安の世となると、人々は神仏に救いを求めます。おのずと人の集まる神社や仏閣には抽象的な宗教性を持った庭がつくられました。

室町時代には、能やお茶の文化が花開きました。数寄者といわれる人々が、お茶に禅の精神を吹き込み、目には見えないものに価値を見いだしました。続いて、回遊式庭園に見られるような豪華絢爛な庭もつくられるようになりました。

江戸時代には、庭の裾野は庶民の生活の場まで広がり、世情の安定で趣味を追い求める庭が登場しました。配石や配植を指南するマニユア

ル本が登場したのもこの時代です。

しかし、日本人の心と深く結びついた庭には、特定のマニユアルがあるわけではありません。庭の前に立つて思い入れれば心が和む。なぜか安らぎを得ることが出来る。そんな空間であっていいのです。

これからも庭は時代とともに、人々とともに変化していくでしょう。そこには長い時間が培ってきた美意識と、日々の暮らしをまるやかにする目には見えない世界が広がっているはずです。

求めているのは何なんだろう

今、なぜ日本庭園なのでしょう。

このことを私は、真面目に日々実践し、自分に問い掛けています。

先人たちは、野辺で見つけた「いいなあ」と思う景色を直接的に庭に写すことをしませんでした。自然の美しさの印象をいったん自分の中に取り入れ、そこに自分の創意と美意識を加えて、庭の心として表現してきました。

だからこそ、日本庭園の内ふところには自然と造形が同居し、伝統美を醸し出しているのです。伝統美はたびたび、わび、さびなどの言葉で借りて表現されています。また、日本庭園は地域性や風土に培われなが

ら今に至っています。さらに、その時代を生きる人々の感覚にマッチしたセンスも日本庭園には生きています。

つくり手として、日本庭園を考えると、ただ、緑を並べただけで満足できない日本人の美意識に因應するため、日本人の心のありようとともにその心を表現する技を常に学び続けなければならないと思っています。そして、今を生きる人々が何を求めているのかを敏感に感じなければなりません。

庭をつくることは人の心と接すること。このプライドに支えられて今という時代を見事に反映した新しい日本の庭の原点を創ればどんなに素晴らしいことでしょう。

未だ見ぬ明日へと大きな世界が広がっています。

私は、このようなことを考えながら、庭をつくってきました。皆様も、いろいろな施主がいて、いろいろな形の敷地があり、いろいろな考えがあつてつくっていると思います。

10人の施主がいて、10人の親方がいれば、それぞれ違う庭ができるのは当然です。同じ庭であるとな何の面白さもないと思います。そんな中で、日々練磨しながら仕事を続けております。

次に、私が手掛けた庭を紹介します。



滝から落ちる流れです。水がたまる部分は保水という形にしています。高木はコナラ、イロハモミジ、低木はヒュウガミズキ、下草はシダ、セキショウなどを入れています。流れに映る木の影や空が見えるなど、自然仕立ての仕上がりとなりました。



④千葉、流山－流れを楽しむ庭

更地からつくった庭です。夫婦2人の住まいということで、平屋のこじんまりした建物です。庭も狭い空間です。建物の近くには木を植えないようにして、園路と流れにしています。水源は滝にしています。奥の植え込みスペースは雑木だけを植栽しています。隣地は公園で雑木がたくさん植栽されており、その景色も取り入れるようにしています。



雑木林の縁の小流れで、庭の排水も兼ねています。スギゴケが出てきています。スギゴケが盛り上がってきて園路や景石を被うようになり、良い感じになっていると思います。



②つくばみらい市の家－心配りされた庭

敷地は約2500坪あります。これは玄関のポーチから見える庭です。奥に見えるのは門で、庭はそこから一段高くなっています。100坪ある建物に対して、豪快さを表現するためにダイスキを使用しました。建物周りの雨落ちはかなり長いので、家の方が1年に1回、雨落ちのゴロタ石を上げて掃除するのですが、年々苦になってきているようです。できるだけ手助けをするようにしています。



腰掛待合の前の延段は幅を狭くしています。使っているのは御影石の切石と筑波石のゴロタです。奥に向かって徐々にコケが出てきています。コケは、普段から水やりや掃除をすれば綺麗に広がるのですが、2500坪もあると管理がなかなかきれいな状態のようです。



③横浜・住宅地の中の狭い庭－改造の庭の苦しさ楽しさ

改造の庭です。植栽は既存樹にほんの数本足しだけです。庭の構成的には、手前の水鉢からの流れになっており、奥には小さな滝があります。水は循環です。

この水鉢は、自然石で相応しい石を見つけ雨の日に加工したものです。



①世田谷・数寄屋の家－落葉樹の美しさと楽しさの庭

ビルの多い街中の一角にある数寄屋の家の庭です。建物には、小間や立礼の席もあります。庭は露地となっています。

立礼の席から見た庭で、右奥に腰掛待合があります。狭い空間ですが、これでも東京では広い方の庭です。作庭当初はコケを貼りましたが、東京の風土に合わず、徐々に消えてしまいました。これはその頃の写真ですが、現在はジゴケが出てきて、少しずつ落ち着いた庭になってきています。

手前にレールが見えますが、ここのガラス戸は全部戸袋の中に入っていますので、見えなくなっています。レール部分にまたがるように一つの石を置き込んで、中と外の空間を繋がるように考えています。



小間前の織部灯籠と蹲踞です。普通ですと、水鉢には笥を使って水を流し入れますが、ここは茶事で使うということで、水は桶で入れるようにしています。

この庭の木々は、ほとんどが落葉樹で、その美しさを生かしています。太陽が出ると木漏れ日で地面に影が映るというような楽しみ方もできます。足元をすっきりさせて、できるだけ草取りや掃除がしやすいようにしています。



⑦日野市の庭－家族の心に届け込む庭

周辺には自動車の会社があり、人通りの多い場所ですが、住宅地としてはなかなか良いところだ。

施主夫婦の住む家を望む景色です。手前側にはお嬢様家族が住んでいるので、両方から楽しめる庭となっており、どこからでも楽しめるようにしています。

建物前は、砂利敷で延段があります。植栽とコケの部分は地こぶになっており、園路は砂利敷です。樹木は少なめですが、コケのボリュームがあるので、明暗が付いています。コケに映る落葉樹の木漏れ日が良い感じになっています。また、春の芽吹きの際は明るい庭になります。



玄関前の前庭です。狭いですが、蹲踞と燈籠を据えています。目隠しに常緑樹のモッコク、ツバキを植えています。それ以外はほとんど落葉樹です。



⑥熱海市 好日庵の庭

好日庵という菓子店で、販売だけでなく、店内で菓子とお茶を出しています。

入口前の蹲踞です。石と四方仏水鉢と水で構成し、回りは洗い出しにしています。砂利敷にすると砂利が動き玄関前が雑然とするので、それを避けています。蹲踞周りには、御影石の切石と自然石を上手く組み入れてつくっています。四方仏は角が取れて、やわらかく仕上げられており、彫りもいいものです。ひさしの下で、植物がほとんど育ちませんので、セキショウを少し植えています。広縁は2階のベランダの下で、雨水が当たらないので、ここで休めるようにしています。



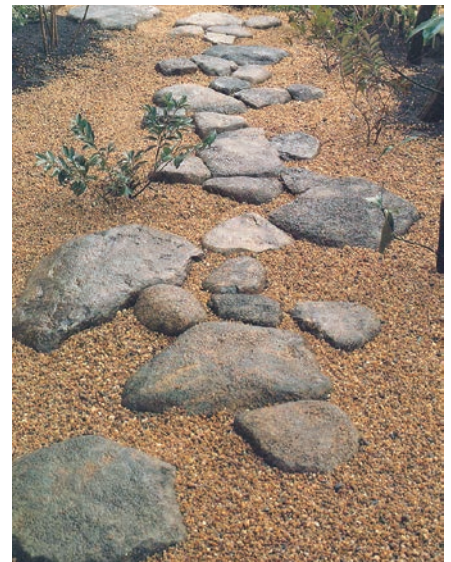
庭の景色です。朝鮮灯籠と蹲踞で構成しています。植物はイロハモミジ、コナラ、奥の太い木がアセビです。常緑樹はアセビを一本入っていますが、これはほとんど下枝のないもので幹の太さを見せるために植えてあります。四方を家に囲まれているので、日差しは真上からしか入りません。そのためか樹木は何となくひょろひょろして、枝は上の方だけになってきています。下草はアセビとヒサカキで、できるだけ日陰に強いものにしています。



⑤船橋市・住宅展示場－新都市型住宅の庭

室内から見る庭の景色です。住宅展示場ですので、ほとんど仕切りは設けず、雑木の間から向かいの建物が見えるよう、道路からも建物や庭が出来るだけ見えるようにつくっています。植栽は雑木だけです。冬、葉が落ちれば、丸見えになる状態です。

周囲の竹垣は教林坊垣です。四ツ目垣はあまりに一般的ですので、ここではこの垣にしました。広縁は2階のベランダの下で、雨水が当たらないので、ここで休めるようにしています。



管理しやすいように、そして明るい感じになるように、地表面は砂利敷にしています。園路は虫食いにして変化を出しています。砂利敷と植栽部分は、できるだけ縁を取らず、土と砂利が混ざった曖昧な感じにしています。



心配りされた庭・待合に向かう延段と流れのスケッチ



好日庵の庭・入口のスケッチ

庭に向かう私の姿勢

第4回 『いい庭をつくりたい』

仙波 太郎
せんば たろう

2022（令和4）年8月28日（日） オンライン講座

はじめに

「庭に向かう私の姿勢」ということですが、今回はこれまでの経験談をお話しいたします。その中で参考になることがあればありがたいと思います。

私がいる松山市というのは、松山城を中心とした城下町で、歴史的な観光地といえば、松山城、そして、日本最古の温泉と言われています。道後温泉があります。とても住みやすいのんびりした土地柄です。

実家は造園業を営んでいましたので大学卒業後は造園の道を選び、京都に修業に出ました。修業先は、「宏流流京都庭常」という事業所で、親方平岡宏^{こうき}氏と子息の佳道氏に師

【仙波太郎プロフィール】



1975年生まれ、愛媛県松山市出身。地元の大学を卒業後、「宏流流京都庭常」で修業。2003年、松山に戻り家業に従事。現在は株式会社仙波農園の代表を務める。

事しました。この事業所は、室町、鎌倉期の枯山水の石組や露地を中心とした日本的な庭づくりを得意としています。そこで約6年間勉強した後、地元松山に戻り家業に従事し、現在に至っています。現在は30歳代以下の若いスタッフ4人と頑張っています。

地元に戻ってから、日本庭園協会香川県支部（現四国支部）の前支部長越智将人氏と出会い、勧められて当協会に入会しました。

越智氏には、何かあるたびに東京などに同行させてもらい、当協会のイベントや勉強会に参加しました。大変良い経験をさせてもらいました。それと同時に、庭づくりの厳しさ、大変さも感じています。現在も継続して活動しております。

庭に向かう私の姿勢

曖昧で単純な言い方ですが、「いい庭をつくりたい」というのが、全ての根本にあります。

「いい庭」とは何か。誰にとっていい庭なのか、これは皆さんにとって

も永遠の課題で、すごく難しいことだと思っています。住宅の庭をつくるにき、自分自身の理想はもちろんあります。しかし、施主側の思いや理想、希望もあります。自分としては、施主の予算で、施主の所有する敷地内に庭をつくるわけですから、なるべく施主の希望をかなえ、期待に応えたいと考えています。その中で、自分の個性や感性、そしてこれまでに勉強したことなどをあからさまでなく、うまく加えるようにしようと思っています。

自分自身は京都の勉強がかなり基本になっており、体に染み付いて取れないというところがあります。例えば、飛石一つ据えるにも、最初に教えてもらったやり方で、今でもなお、それを真剣にやっています。

庭を設計するにあたっては、まず、施主との対話を非常に大事にしています。この話で、その家庭のことや土地の条件などがいろいろ制約として出てきます。それらに基づいて庭の内容を構成していくことが多いです。初めから自分はこれがつくりたい、これをやらしてくれという形では進めないことが多いです。

設計では、図面を必ず描きます。若いスタッフもいますし、言っただけでは覚えられないですから。私自



T邸その1・アプローチのイメージスケッチ

身にとっても図面化して、頭の中を整理して、次の段階を考えていくためにも図面は必要だと思っています。また、外構工事など内容や規模によって外注できる仕事などは任せてしまいうことあるので図面できちんと描いて、指示するようにしています。作庭では、日本的な庭をつくるケースが多いです。ガーデンングのような仕事を依頼されることはあまりありません。

施工にあたり石や植物を使っている中で、空間内の物質量を気にしています。多く使いすぎることはなるべく避けようと思っています。植物は植栽した次の年にはバランスを崩していきまますから、2年、3年経ったら、どうなっていくかをきちんと考えて、なるべく少ない量で、配植するようにしています。また、色合い、背景とのマッチングや距離感も考えます。植栽では「透ける感」とか植物同士の「重なり具合」も結構

仙波太郎氏・作庭事例紹介



① K邸(大洲市)

お茶の稽古場の新築に伴う作庭です。ここは立礼席から見た姿です。コケと砂利を入れて仕上げています。あまり物を多く入れ過ぎないようにしています。飛石は既存の石垣に積んであった石を再利用しました。手前の砂利も現場で出た石です。燈籠も既存のものです。

植栽樹木はシャリンバイ、コハウチワカエデです。背景が生きるように樹高や葉のつき具合などに考慮してこの程度で収めています。右奥の袖垣は、クロチクの鉄砲垣です。両側はサビ丸太です。空間のバランスを見て、元々あったものの半分くらいの幅30cmにしています。通りやすさにも配慮しました。(2021.5)



地元の青石を使用した石積は建築前に施工しました。手前の土間は地元の真砂土と普通セメントを混ぜただけの洗い出しです。濡れると茶色に見え、乾くと白っぽくなります。真ん中の伽藍石は、施主が彫刻を置きたいということで配置しましたが、現在は壺を置き、花が生けられています。置燈籠でも良いし、多目的に使ってもらえたら良いと思います。(2021.5)

重要なところだと思っています。これができるかできないかで、広がりだったり、遠近感がうまく使えたり、相乗効果が出てきたりしますので、かなり重要視しています。

作庭中はいつも、どうすれば美しく見えるかを考えています。逆になぜ綺麗に見えないのか、どうしたら綺麗に見えるかを考えています。

使用材料についてお話しします。景石や石積などに使用する石材はなるべく地元のもの、もしくは地元に近いものを使いたいと思っています。

地元で施工する場合、例えば栃木県で採掘される大谷石でテラスをつくっても、違和感を覚えるので、なるべく、愛媛県内や広くても四国内で採れるようなものを使いたいと思っています。

植物については、近隣の山に自生

しているものを出来るだけ使用します。それは、夏の暑さに対応したいということが一番にあります。やはり、植物を植えるのであれば、年々より良くなつてほしいと思います。

こちらでは、南面に植えた木が、植えた年が一番良かったということがよくあります。年々悪くなるのではなく、植物の生命力を借りて、瑞々しく、緑が綺麗になるように使いたいという思いがあります。そして、毎年の手入れにより、美しく仕立てができる樹種を選びます。というのは、自分がつくった庭は継続して管理したいと思っているからです。やはり昔から使われている木、今の人気の樹種や新しい洋木ではなくて、例えばアラカシ、イヌマキなど毎年

グランドカバーは、日本的な仕上げとしてスギゴケをよく使います。しかし、松山は海が近いせいかなかり乾くので、うまくいかないケースも多いです。さらに土の問題もあります。土は真砂土と言って栄養もなく泥と砂だけの土で、あまりコケがうまく育たないのです。そこで、スギゴケとタマリユウを混植してグランドカバーにしていることも多いです。コケがうまくいかなかった場合は、タマリユウを増やして補っています。

維持管理については、つくった庭はなるべく自分で管理をしたいと思っています。植物は人間の都合です。庭に連れてこられたという状況です。ので、植えた樹木だけはお世話してあげたいという思いがあります。

毎年手入れをすれば、植物の力も借りて、より美しく、仕立てもできて、

なお育成もできます。私は、維持管理を単なる剪定ではなくて、庭をリフレッシュさせる作業だと思っています。ですので植木を小さく、さっぱり剪定したという感じではなく、庭全体の構成がどうだろうかとか、うまく育っているかとか、そのようなことを見ながら、維持管理はしていきたいと思っています。

次に、作庭事例を紹介します。①から③は露地です。露地の庭をつくるにあたっては、以前、小田原市で開催された神奈川県支部主催の講習会を受けたことが大変勉強になりました。当時の支部長は清水哲也氏、講師は金綱重治氏でした。この講習を受けて、実際の作庭に活かせるということ、神奈川県支部の方々は大変お世話になりました。その節はありがとうございました。



門から玄関までの本通路になります。正面の奥には主庭が見えています。石貼りの通路が長く単調になるため、主庭にも使っている六方石をアクセントとして入れています。敷地が広く、建築が大きいので、できるだけ大きな樹木を使いました。(2016.8)



⑤ N邸

家族のためのプライベートな主庭です。玄関周辺のアプローチから見ることでもでき、手前に樹木を配置し、「透けた感」を出し、それにより広がりが出るようにしました。奥には高さ45cmほどの庵治石の石積をつくり、立体感を出しました。目隠し効果のある常緑樹を多く使っています。(2018.5)

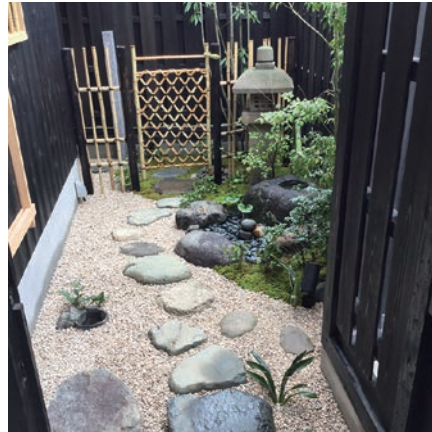


門から玄関まで通路沿いに小川をイメージした小さな流れをつくっています。川底などは地元の真砂土などを使った洗い出し仕上げにしています。この洗い出しは越智将人氏に教えてもらった工法です。(2017.2)



③ K邸(松山市)

狭い空間につくった露地です。物の大きさに配慮しました。縁先手水鉢は、細めの丸鉢が良いと思いましたが、施主の要望で橐の水鉢にしました。やはりすごく窮屈で周りとのバランスを取るのがとても難しかったです。正面に見える袖垣は、メダケの松明の鉄砲垣です。濡れ縁の部分はクロチクです。(2015.11)



玄関から見た様子です。蹲居の前石あたりまで軒が出て、雨が当たりませんので、砂利を使っています。蹲居の部分は狭く見えないかもしれませんが、写真で見ると、実際はかなり狭いところです。枝折戸は幅2尺(60cm)です。(2015.11)



④ T邸 その1

座敷から見える枯山水の石組の主庭です。地元のあぶら石と愛媛産の六方石の横の線を組み合わせた石組です。遠近感を出すために、植栽は手前には背の高いものを、奥には低い樹木を配置しています。冬、さみしくならないように要所に常緑樹を配置しています。(2016.8)



② S邸

お茶の先生の新築に伴う作庭で、ここは露地の部分です。奥に見える待合まで歩く道すがらです。飛石の配石は庭の骨格として重要視しています。軒内の三和土とコケとの間は、菊炭の雨落ちとしています。八女石の利休型燈籠は、施主の要望で据えました。八女石はすぐ風合いが出て、古さも感じられます。

アカマツやイヌマキ、アラカシ、モッコク、シャリンバイなどほぼ常緑樹です。落葉樹は季節を楽しむイロハモミジを入れています。低木はシャシャンボやアセビ、アオキです。人が歩くのに邪魔にならないように植物は最小限にしています。あまり大きい木は使っていません。(2021.10)



奥の玄関を隠すようにウメ(白梅)を植えています。足元はタマリユとスギゴケの混植です。燈籠は出雲石の小屋棒型です。この石も吸水率が大変高く、古さがすぐ出てきます。門の外側に、落葉樹のイロハモミジ、常緑樹のモッコク、ゴモジュを配置しています。工期がない中、タイル屋や大工などと譲り合いながらなんとか完成させました。(2021.11)



⑥T邸 その2

駐車場の舗装は、石貼りとコンクリートの洗い出しです。前面を石貼りにするより板石が目立ちます。玄関が瓦の四半敷きのポーチになっていることと敷地の南東角が少し切れていることを利用したアプローチの板石敷きは、斜め45°にふった通路にしています。右の竹垣はあえて透かしています。奥側は自転車や三輪車、荷物を置くスペースで、これらの目隠しにしています。完全に遮扉せず、目線がそこに行かない程度の透かしにしています。遮蔽垣にすると、多分この空間は狭く見えていたかと思います。(2020.4)



門柱横は四ツ目垣です。ここに遮蔽的な塀があると、車を出しにくく、子どもの飛び出しなど気が付きにくいと、施主が気にしていたので、見通しがきく四ツ目垣にしました。

イロハモミジ、ウラジロガシを植栽しました。幼木ですが、成長にあわせて玄関の目隠し効果をうまくつくっていききたいと思います。カシは剪定によって大きくも小さくもできる樹木ですので、要望に合わせて大きく仕立てたり、透かししたりして調整していきます。(2020.2)

※写真はすべて筆者撮影

おわりに

今まで自分がやってきたことを紹介しました。どの庭も、自分として

はかなり考えて、いろいろと結論付けてつくってきました。出来上がった庭が綺麗に見えるかが気になるところですが、実際、綺麗に見えなかつたら、やり替えたりもしました。

さらに、なぜ綺麗に見えないかをよくよく考えています。しかし、できてみたらやはりここがこうだったなどと反省も多いです。若いスタッフとみんなで力を合わせ、しかし、その過程など恥ずかしくて、お見せすることなど到底できず、なんとかやりきっているという状態です。これからもいい庭ができるように日々の鍛錬に努めていきたいと思っています。

(正会員)

連続講座を受講して

安藤 由一郎
あんどう ゆういちろう



1981年生まれ。勤務地、福岡市。2012年度から2020年度まで官公庁発注の造園工事、民間発注の商業施設等の植栽工事に携わる。2021年度から、指定管理業務で福岡市の日本庭園「友泉亭公園」「楽水園」「松風園」の管理運営に携わる。好きな庭…水前寺成趣園

施工例を拝見させていただき、多くの気づきをいただきました。まず、

石材等、極力地元産の材料を使用し、その土地柄の良さ・特徴を生かした庭づくりをされており、好感が持てました。また、今までの京都での経験等を活かし、単調ではなく、自然の景を融合させた庭づくりが素晴らしい、とても気持ちのいいものを感じました。

透ける感、重なり具合に注力され

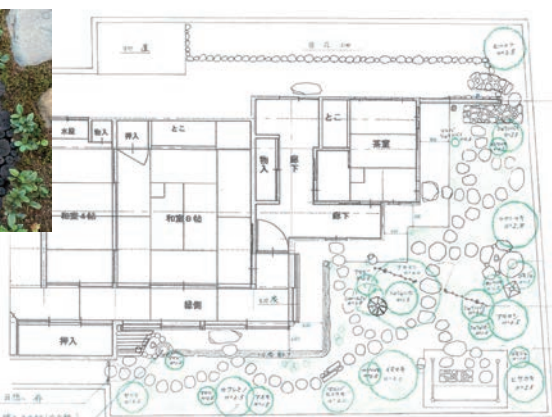
ており、そのことで庭に立体感が生まれ、面積以上に広さを感じる空間に仕上がっており、とても重要な要素であると感じました。配置する樹木については、手前に中低木、奥に高木を配置して立体感を出す事が多いですが、葉の密度が低い中高木を手前に配置し、奥を透かしてみせることで立体感を出していました。

遮蔽物については、狭い空間を広くみせるために竹垣に隙間を設けることで透ける感を上手く利用されていました。これらの技法はとても勉強になり、今後の施工の参考にさせていただきます。

また、経験を積んで自信をつけていくと自身の志向に偏りがちですが、仙波先生は、お客様の要望をよくヒアリングし、最優先に考慮されており、お客様がいらっしゃってこ



菊炭の雨落ち



S邸・露地の平面図 (仙波太郎氏作図)

その仕事であり、お客様最優先で考えることの大事さを改めて教えてくださいました。

第1回 作庭基礎技法・先人の作風を知る

2009 年			2010 年		
10月25日	上野 周三	現場の把握と計画	12月13日	小沼 康子	図面はなぜ必要か
	犬養 修司	小形 研三の作風		野村 脩	飯田 十基の作風
11月29日	犬養 修司	見学・東洲江庭園他（足立区）	1月24日	小沼 康子	見学・本郷給水所公苑他（文京区）
	廣瀬 慶寛	設計作業の進め方		平井 孝幸	作庭材料の吟味
	鈴木 崇	中島 健の作風		大成 白歩	岩城 巨太郎の作風
	廣瀬 慶寛	見学・横浜三溪園（横浜市）	2月28日	大成 白歩	見学・見浜園（千葉市）
				高橋 良仁	施工の基本姿勢
				大平 暁	斎藤 勝雄の作風
				望月 敬生	見学・能仁寺（飯能市）
	高橋 良仁			高橋 良仁	

第2回 作庭基礎技法・先人の作風を知る
(第1回とほぼ同じ内容で開催)

2010 年			2011 年		
4月25日	上野 周三	現場の把握と計画	2月27日	高橋 良仁	人間（オーナーなど）と向き合う
	福永 邦昭	小形 研三の作風		龍居 竹之介	庭園協会創設者たちの作庭
5月23日	福永 邦昭	見学・川崎市民プラザ（川崎市）	4月24日	小沼 康子	見学・千鳥ヶ淵戦没者墓苑（千代田区）
	小沼 康子	図面はなぜ必要か		廣瀬 慶寛	水と向き合う
	鈴木 崇	中島 健の作風		與五 澤康司	吉村 蔵の作庭
	鈴木 崇	見学・川口市立グリーンセンター（川口市）		龍居 竹之介	見学・小石川後樂園（文京区）
6月27日	廣瀬 慶寛	設計作業の進め方	5月29日	金網 重治	植物と向き合う
	野村 脩	飯田 十基の作風		大胡 周一郎	大胡 隆治の作庭
	廣瀬 慶寛	見学・瑞泉寺他（鎌倉市）	6月26日	大胡 周一郎	見学・大胡邸（横浜市）
	平井 孝幸	作庭材料の吟味		平井 孝幸	添景物と向き合う
	大成 白歩	岩城 巨太郎の作風		斎藤 忠一	重森 三玲の作庭
	大成 白歩	見学・川村記念美術館（佐倉市）		斎藤 忠一	見学・福泉寺（港区）
8月29日	高橋 良仁	施工の基本姿勢	8月7日	上野 周一	石と向き合う
	大平 暁	斎藤 勝雄の作風		三鍋 光夫	田中 泰阿弥の作庭
	大平 暁	見学・ホテルパシフィック東京（港区）		三鍋 光夫	見学・尚半亭他（鎌倉市）
				高橋 康夫	見学・東池袋中央公園（豊島区）

第3回 作庭基礎技法・先人の作風を知る

2011 年			2012 年		
2月27日	高橋 良仁	人間（オーナーなど）と向き合う	3月25日	鈴木 直衛	庭に向かう私の姿勢
	龍居 竹之介	庭園協会創設者たちの作庭		望月 敬生	先人の道・J・コンドル
4月24日	小沼 康子	見学・千鳥ヶ淵戦没者墓苑（千代田区）	4月22日	中山 なつ希	見学・旧古河庭園（北区）
	廣瀬 慶寛	水と向き合う		古平 貞夫	庭に向かう私の姿勢
	與五 澤康司	吉村 蔵の作庭		龍居 竹之介	先人の道・福羽逸人
	龍居 竹之介	見学・小石川後樂園（文京区）		龍居 竹之介	見学・新宿御苑（新宿区・渋谷区）
5月29日	金網 重治	植物と向き合う	5月27日	菊地 正樹	庭に向かう私の姿勢
	大胡 周一郎	大胡 隆治の作庭		中澤 周一	先人の道・蛭田 貫二
	大胡 周一郎	見学・大胡邸（横浜市）		大平 暁	見学・大田黒公園（杉並区）
6月26日	平井 孝幸	添景物と向き合う	7月29日	小沼 康子	庭に向かう私の姿勢
	斎藤 忠一	重森 三玲の作庭		小沼 康子	先人の道・伊藤 邦衛
	斎藤 忠一	見学・福泉寺（港区）		龍居 竹之介	見学・北の丸公園（千代田区）
8月7日	上野 周一	石と向き合う		大平 暁	庭に向かう私の姿勢
	三鍋 光夫	田中 泰阿弥の作庭		高橋 康夫	先人の道・荒木 芳邦
	三鍋 光夫	見学・尚半亭他（鎌倉市）		高橋 康夫	見学・東池袋中央公園（豊島区）

第4回 作庭基礎技法・先人の作風を知る

2012 年			2013 年		
3月25日	鈴木 直衛	庭に向かう私の姿勢	5月26日	新 肇	庭に向かう私の姿勢
	望月 敬生	先人の道・J・コンドル		上野 周三	中根 金作の作風
4月22日	中山 なつ希	見学・旧古河庭園（北区）		上野 周三	見学・護国寺（文京区）
	古平 貞夫	庭に向かう私の姿勢	6月30日	金網 重治	庭に向かう私の姿勢
	龍居 竹之介	先人の道・福羽逸人		石井 敬明	小島 佐一の作風
	龍居 竹之介	見学・新宿御苑（新宿区・渋谷区）	7月28日	金網 重治	見学・茅山荘（葉山町）
5月27日	菊地 正樹	庭に向かう私の姿勢		田中 徳夫	庭に向かう私の姿勢
	中澤 周一	先人の道・蛭田 貫二		廣瀬 慶寛	原 三溪の作風
	大平 暁	見学・大田黒公園（杉並区）		廣瀬 慶寛	見学・三溪園（横浜市）
6月24日	河西 力	庭に向かう私の姿勢	9月29日	中村 寛	庭に向かう私の姿勢
	小沼 康子	先人の道・伊藤 邦衛		廣瀬 竜一	小川 正行（植熊）の作風
	小沼 康子	見学・北の丸公園（千代田区）		加藤 新一郎	見学・個人邸（千葉県）
7月29日	大平 暁	庭に向かう私の姿勢	10月27日	橋本 善次郎	庭に向かう私の姿勢
	龍居 竹之介	先人の道・荒木 芳邦		龍居 竹之介	飯田 十基と小形 研三の作風
	高橋 康夫	見学・東池袋中央公園（豊島区）		高橋 康夫	見学・新宿中央公園（新宿区）

第5回 庭に向かう私の姿勢・先人の道

2013 年			2014 年		
5月26日	新 肇	庭に向かう私の姿勢	5月11日	竹田 利光	庭に向かう私の姿勢
	上野 周三	中根 金作の作風		萱森 敬記	先人の道・風間 宗伯の作風
	上野 周三	見学・護国寺（文京区）	6月8日	武田 潔	見学・六義園（文京区）
6月30日	金網 重治	庭に向かう私の姿勢		望月 敬生	庭に向かう私の姿勢
	石井 敬明	小島 佐一の作風		廣瀬 慶寛	先人の道・飯田 十基の作風
7月28日	金網 重治	見学・茅山荘（葉山町）	7月13日	古平 貞夫	庭に向かう私の姿勢
	田中 徳夫	庭に向かう私の姿勢		高橋 康夫	先人の道・井下 清の世界
	廣瀬 慶寛	原 三溪の作風		高橋 康夫	見学・井の頭恩賜公園（武蔵野市・三鷹市）
	廣瀬 慶寛	見学・三溪園（横浜市）	8月10日	横山 英悦	庭に向かう私の姿勢
9月29日	中村 寛	庭に向かう私の姿勢		内田 均	先人の道・河原 武敏の世界
	廣瀬 竜一	小川 正行（植熊）の作風		北村 均	見学・清澄庭園（江東区）
	加藤 新一郎	見学・個人邸（千葉県）	9月14日	厚澤 秋成	庭に向かう私の姿勢
10月27日	橋本 善次郎	庭に向かう私の姿勢		本川 勇	先人の道・小島 佐一の世界
	龍居 竹之介	飯田 十基と小形 研三の作風		角田 彰	見学・旧芝離宮恩賜庭園（港区）
	高橋 康夫	見学・新宿中央公園（新宿区）		角田 彰	見学・旧芝離宮恩賜庭園（港区）

第6回 庭に向かう私の姿勢・先人の道

2014 年			2015 年		
5月11日	竹田 利光	庭に向かう私の姿勢	5月25日	上野 周三	現場の把握と計画
	萱森 敬記	先人の道・風間 宗伯の作風		福永 邦昭	小形 研三の作風
6月8日	武田 潔	見学・六義園（文京区）	5月23日	福永 邦昭	見学・川崎市民プラザ（川崎市）
	望月 敬生	庭に向かう私の姿勢		小沼 康子	図面はなぜ必要か
	廣瀬 慶寛	先人の道・飯田 十基の作風		鈴木 崇	中島 健の作風
7月13日	古平 貞夫	庭に向かう私の姿勢		鈴木 崇	見学・川口市立グリーンセンター（川口市）
	高橋 康夫	先人の道・井下 清の世界	6月27日	廣瀬 慶寛	設計作業の進め方
	高橋 康夫	見学・井の頭恩賜公園（武蔵野市・三鷹市）		野村 脩	飯田 十基の作風
8月10日	横山 英悦	庭に向かう私の姿勢		廣瀬 慶寛	見学・瑞泉寺他（鎌倉市）
	内田 均	先人の道・河原 武敏の世界	7月25日	平井 孝幸	作庭材料の吟味
	北村 均	見学・清澄庭園（江東区）		大成 白歩	岩城 巨太郎の作風
9月14日	厚澤 秋成	庭に向かう私の姿勢		大成 白歩	見学・川村記念美術館（佐倉市）
	本川 勇	先人の道・小島 佐一の世界	8月29日	高橋 良仁	施工の基本姿勢
	角田 彰	見学・旧芝離宮恩賜庭園（港区）		大平 暁	斎藤 勝雄の作風
	角田 彰	見学・旧芝離宮恩賜庭園（港区）		大平 暁	見学・ホテルパシフィック東京（港区）

第7回 庭に向かう私の姿勢・先人の道

2015 年		
5月31日	由比誠一郎	庭に向かう私の姿勢
	龍居 竹之介	先人の道・父 龍居 松之助の世界
	龍居 竹之介	見学・小石川後楽園（文京区）
6月28日	望月敬生	庭に向かう私の姿勢
	吉田 正夫	先人の道・父 吉田 正吾の世界
	望月敬生	見学・泉岳寺（港区）
7月26日	高田宏臣	庭に向かう私の姿勢
	野村脩	先人の道・祖父 野村 基五郎の世界
	土屋武詞	見学・向島百花園（墨田区）
8月30日	清水哲也	庭に向かう私の姿勢
	中澤周一	先人の道・父 中澤 栄三の世界
	中澤周一	見学・豊前屋庭石店（世田谷区）
9月27日	福永邦昭	庭に向かう私の姿勢
	曽根珠江	先人の道・夫 曽根 三郎の世界
	小沼康子	見学・殿ヶ谷戸庭園（国分寺市）

第8回 庭に向かう私の姿勢・先人の道

2016 年		
5月29日	藤枝修子 遠藤太一	庭に向かう私の姿勢
6月26日	松井修一 中山なつ希 三橋一夫	見学・旧岩崎邸庭園（台東区） 庭に向かう私の姿勢 中瀬操の世界
7月31日	中山なつ希 山崎誠子 江夏大三郎	見学・浜離宮恩賜庭園（中央区） 庭に向かう私の姿勢 飯田十基 川崎幸次郎の世界
8月28日	小沼康子 服部マリ 龍居竹之介 龍居竹之介	見学・目白庭園（豊島区） おとめ山公園（新宿区） 庭に向かう私の姿勢 上原敬二の世界
9月25日	小沼康子 高橋康夫 高橋康夫	見学・明治神宮（渋谷区） 庭に向かう私の姿勢 長岡安平の世界
	高橋康夫	見学・芝公園（港区）

第9回 建物と庭

2017 年			
5月28日	上田卓聖	建物と庭・建築家	
	上野周三	建物と庭・造園家	
	上野周三	建物と庭・造園家	
6月25日	杉浦干城	建物と庭・建築家 対談	
	中村寛	建物と庭・造園家	
	中村寛	建物と庭・造園家	
7月30日	金田正夫	建物と庭・建築家	
	落合悟	建物と庭・造園家	
	金田正夫	建物と庭・造園家	
8月27日	龍居竹之介	新宿御苑で見る建物と庭	
	龍居竹之介	新宿御苑で見る建物と庭	
9月24日	三鍋光夫	田中泰阿弥の庭と建物	
	三鍋光夫	田中泰阿弥の庭と建物	
	見学・瀬川邸（文京区）	見学・飯島邸（杉並区）	
	見学・新宿御苑（新宿区）	見学・ぎやらりー無垢里（渋谷区）	

第10回 建物と庭

2018 年			
4 月 29 日	木股常精	建物と庭・建築家	見学・木股邸（武蔵野市）
	由比誠一郎	建物と庭・造園家	
5 月 27 日	高野保光	建物と庭・建築家	
	本川 勇	建物と庭・造園家	
6 月 24 日	高水 謙二	建物から見た庭・庭から見た建物	見学・野田邸（練馬区）
	金網 重治		
7 月 29 日	金網 重治	見学・燈々庵（あきる野市）	
	高橋良仁	建物から見た庭・庭から見た建物	
8 月 26 日	井上 洋介	建物と庭・建築家	見学・医王院安養寺（大田区）
	平井 孝幸	建物と庭・造園家	
	平井 孝幸	見学・鉢嶺（世田谷区）	
	平井 孝幸		

第11回 建物と庭

2019 年	
5月26日	上野まゆみ 建物と庭・建築家
米山拓未	庭と建物・造園家
米山拓未	見学・個人邸（横浜市南区）
6月30日	菅谷輝男 建物と庭・建築家

第12回

野村光宏	庭と建物・造園家
野村光宏	見学・個人邸（新宿区）
磯守	建物から見た庭・庭から見た建物
磯守	見学・永明院（八王子市）
鈴木康幸	建物から見た庭・庭から見た建物
鈴木康幸	見学・個人邸、旧本田家住宅（国立市）
佐藤偉仁	建物と庭・建築家
新肇	庭と建物・造園家
佐藤偉仁	見学・浜離宮恩賜庭園鷹の御茶屋（中央区）

第13回 庭に向かう私の姿勢

2022 年	
5月29日	桃井賢二
6月26日	木目田裕一
7月31日	廣瀬慶寛
8月28日	仙波太郎
9月25日	石亀靖
9月25日	仲佐修二
庭づくりの基本を身につけたい方へ	庭 いつもあこがれます
いい庭をつくりたい	創源一滴水
島根県の庭・ベトナムでの作庭	北方圏 人と気候風土と庭

技術委員会では、若手庭園実務者を対象とした「庭園技術連続基礎講座」を2009（平成21）年度より2022（令和4）年度まで全13回を開催しました。2020（令和2）年度は新型コロナウイルス感染症の影響により開講を見送りました。2021（令和3）年度からはオンライン講座としました。これまで、講座数は63回、講師は延129人、見学地は延56ヶ所、約410名が受講しました。各回の講座内容、見学地、講師は一覧表の通りです。

これまで実施された中で、もう一度聴きたい講座、訪れたい見学地など関心を持たれた回がありましたらお知らせください。また、今後開催のご希望や本講座へのご意見、ご要望がありましたら事務局までお寄せください。

技術委員長 廣瀬慶寛

本部・支部たより

「みんなの緑学」

10月7日（金）、「現代日本庭園の巨匠たち」その作庭手法と庭園観第4回小形研三」、講師・龍居竹之介名誉会長が開催されました。講演内容は次号に掲載予定です。

11月24日（木）、「長尾欽弥とよね」その人物と本宅・別邸の庭を巡って」、講師・加藤映氏が開催されました。講演内容は、本誌に掲載予定です。

総務委員会

●日本庭園協会創立105周年記念事業アイデアを引き続き募集中！

本年、2023年は日本庭園協会が創立105周年を迎えます。また、当協会とかかわりが深い公園制度の誕生から150周年という節目の年にも重なります。

そこで、本年を創立105周年記念イヤーとすべく事業展開を図ろうと考えています。

現在、シンポジウム、記念講演会、東日本大震災復興記念庭園見学ツアー、清澄庭園連続講演会冊子発行などが候補に挙がっていますが、会員の皆様もこの記念事業に企画段階から参加していただきたく記念事業のアイデアを募集したいと思います。

庭園協会事務局宛、メールかファックスでお寄せ下さい。斬新なアイデアをお待ちしております。なお、締め切りは2月15日です。

e-mail: gs120@m7.dion.ne.jp

FAX: 03(3204)0595

●龍居竹之介名誉会長のロングラン講演会は、第5回…10月19日（水）、殿ヶ谷戸庭園の見学会と『幕末から現代の庭世界（その2）』と題する講演、第6回…11月16日（水）、『江戸前半の庭と暮らし』と題する講演、第7回…12月21日（水）、『作庭書増え庭巡りも人気』と題する講演、大田黒公園の見学会が開催されました。

鑑賞研究委員会

●12月15日（水）、「清澄庭園鑑賞会」が開催されました。

涼亭において龍居竹之介名誉会長による「清澄庭園」明治の庭の私たち」と題して江戸時代の大名庭園の流れから清澄庭園の成り立ちと歴史、明治の庭としての特異性、岩崎



加藤精一常務理事のお点前
酒井和佳子氏撮影

家の貢献についての講演がありました。昼食は涼亭からの眺めを背景に、人形町今半の3段お重弁当をいただきました。午後は、加藤精一常務理事による煎茶点前（茶櫃点前、後見・専心小笠原流得本峨王先生）を拝見し、その後、北村均理事の案内でマツの雪吊りなど冬支度も整った師走の庭園を逍遙。お天気にも恵まれ、冬の清澄庭園を観賞する貴重な一日になりました。

東京都支部

10月22日（土）～10月30日（日）までの9日間開催された「第20回日比谷公園ガーデンングショー2022」のガーデンコンテストにおける「ライフスタイルガーデン部門」に、支部の新たなスタートを記して支部会員有志が出展しました。多くの来場者にご覧いただきました。



「庭屋一如」蹲踞周りの経年変化を表現
鈴木康幸氏撮影

計報

当協会元常務理事、広報委員会委員長の太平 暁氏が令和4年11月7日、ご逝去されました。享年91歳でした。ご冥福をお祈りするとともに、謹んでお知らせいたします。

新入会員・氏名（住所）

（2022（令和4）年10月1日から12月30日入会）
深谷玲子（東京都）、深谷健司（東京都）、斎藤小百合（東京都）、平井美鈴（神奈川県）
（入会順・敬称略）

編集後記

★巻頭言の興臨院 方丈前庭は、金綱重治氏の師、中根金作氏により復元された枯山水庭園。白砂に石組を配し、理想の蓬莱世界を表したとも。茶室「涵虚亭（かんきょてい）」も見どころ。春と秋に特別公開されます。（や）

★今回の清澄庭園鑑賞会は、菊地正樹鑑賞研究委員長の発案・企画によるもの。清澄庭園を国指定の名勝に！という龍居竹之介名誉会長の熱い思いへの後押しの意味もあり、多くの方々に清澄庭園の素晴らしさを堪能していただく企画でした。参加者の笑顔からその目的は十分に達成されたと実感しました。（う）
★「庭園技術連続基礎講座」の記事化は内田均と小沼康子が担当しました。

編集担当…小沼康子／内田均／中山なつ希
／酒井和佳子
本文デザイン…由比まゆみ